



# 自然科学書協会 会報

## NSPA JAPAN

THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN



2023 年 1 月 11 日 No.1

(通算 102 号)

### 目 次

1. 年頭にあたってのご挨拶 (理事長 飯塚 尚彦：産業図書) ..... 2
2. 自然科学の時間：「5分で読める寄生虫ばなし」 ..... 4  
(片平 浩孝：麻布大学生命・環境科学部講師)
3. 会員社訪問 社長インタビュー (恒星社厚生閣 社長 片岡 一成) ..... 8
4. 出版平和堂第 54 回出版功労者顕彰会報告 (広報委員会) ..... 10
5. 事務局だより ..... 11
6. 編集後記 ..... 12

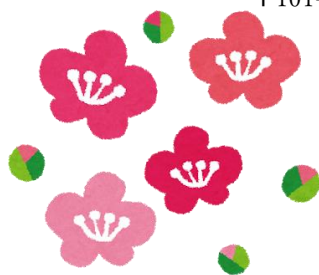
発行人：飯塚 尚彦 / 編集：広報委員会

一般社団法人 自然科学書協会

<https://www.nspa.or.jp/>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 神保町 101 ビル 3 階

TEL：03-5577-6301



## ◆ 1. 年頭にあたってのご挨拶 ◆

理事長 飯塚 尚彦

### 「2023年新年によせて」

2023 年も無事に明けました。皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

当協会の第 72 期は昨年 12 月末日をもって無事半期を折返しました。これも皆様のご理解とご協力の賜物と感謝申し上げます。

今期は役員改選がありますので、現執行体制による 2 年間の活動を総括する意味でも、下半期の活動を一層充実させ、応分の成果をもって来期に繋げたいと思います。

2022 年における当協会の主な事業活動は、千葉と札幌での「自然科学書フェア」の開催、公式ホームページの大幅なリニューアル、定期的な会報発行の継続、会員向けオンライン研修会の複数回開催などを挙げる事ができます。また、JCOPY、SARTRAS など対外的な活動にも注力しました。同時に、来るべき当協会創立 80 周年にむけて特定資産の用途を定めた「80 周年記念事業資金取扱要領」の策定、商法改正にともなう「電子帳簿保存法事務規程」など規定類の整備も行いました。詳細については会員報告会や会報の紙面に譲りますが、わが国がまだ COVID-19 の制約を受ける中であって、多岐にわたる活動が実施できた背景には、副理事長はじめ役員各位のご尽力、委員会に所属する委員お一人お一人の活躍があることは言うまでもありません。心より御礼申し上げます。



さて、2022 年を振り返ると、やはり年間を通して COVID-19 の影響を受けた 1 年だったと思います。年明け早々には新規陽性者数が急増し、これが第 6 波と報じられました。その後一旦落ち着いたかに見えましたが、8 月には第 7 波、11 月には第 8 波が報じられ、収束することなく越年しました。日常的なマスク着用姿に変化はなく、テレワークやリモート授業などは日々の生活により一層浸透したように見受けれます。そして、ガソリン価格の高騰、電力不足、食糧問題、対ドル円安、物価上昇、7 月には元首相が遊説中に射殺されるという事件も勃発。また、自殺者の増加、特に若年層での増加は、将来に希望を見出せない若者のおかれた現状を反映していると識者は言います。社会を閉塞感が覆う中で、包容力というか、寛容さを失った現れかもしれません。“自己責任”という言葉の背景には、共同体や相互扶助の否定、そして分断。社会から包容力が失われてゆくように思えてなりません。

資産形成に対する考えにも変化が見られるようになりました。例えば、比較的若くて収入に余裕がある層が不動産に縛られるリスクを嫌って自らは賃貸物件に住み、投機用の不動産を所有するというケースを耳にします。これは終身雇用という日本の企業文化の終焉がその背景にあるの

ではないかと思います。また、対ドルが円安に振れてからは、海外の農園などに働きに出る若者もいると聞きます。時給換算すると国内で働くより効率的であり、海外で働いた方が資産形成できるということだそうです。

一方、海外に目を転じると、2月に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、解決の糸口を見出せないまま越年しました。そして、この軍事侵攻を契機に領土、エネルギー、原材料、食糧等の調達リスクや難民政策……などなど、様々な問題が表面化し、各国の利害関係が複雑に絡みあっている様子があぶりだされました。

また、仮想通貨決済企業の破綻や、安定成長を続けていた GAF A の株価下落も話題になりました。GAF A の一角である Facebook は META に社名変更しメタバースに活路を見出そうとし、Twitter 社は経営者が交代しその経営判断も取締役会からオーナー個人に移行しました。ネット時代の優良企業も存続のため改革を迫られているのだと思います。

ところで、マキアヴェリは『君主論』の中で、「ある道を進んで繁栄を味わった人は、どうしてもその道から離れる気にならない」(池田康 訳, 中公 e ブックス, 位置 No.2686/3361) と述べています。そして、「(決まった手しか打てない人は) 時勢が変わっても新たな手が打てず破滅する」という趣旨の文章が続きます。

なぜ、決まった手しか打てないのでしょうか。それはその手が過去の成功体験に裏付けられているからだだと思います。そして、成功体験が多ければ多いほど、強烈であればあるほど、その手は捨てがたくなるのでしょうか。しかし、時代が過ぎればその手が通用しなくなるのも必然です。

好むと好まざるとにかかわらず、世界の一員である我が国も改革の中にあると思います。その中であって自然科学書協会はどうかあるべきでしょうか。

当協会の事業は、公益法人制度改革を経て「実施事業(公益事業)」と「その他の事業(共益事業)」に区分され、活動にも一般社団法人としての制約があります。しかしそれらが自然科学書協会の発展を阻害するものではありません。これからも維持継続すべきことと改革改善すべきことを見極め、将来を見据えて目標を定め、具体策を立案して実行する。勿論それはグレートリセットとかゼロベースといった過去を否定することからの出発ではなく、過去の経験を踏まえた上で、未来に向け小さな脱皮を繰り返すことだと思います。

千々和泰明は『戦争はいかに終結したか』(中公新書 2652) の中で、20 世紀における戦争の歴史を出口戦略という切り口で分析し、その本質は「現在の犠牲」と「将来の危険」のシーソーの中で「紛争状態の根本的解決」と「妥協的平和」の間を揺れ動くことだと指摘しました。そして紛争状態の解決策に「根本的解決」から「妥協的平和」まで振れ幅がある以上、選択した出口戦略が新たな紛争の火種になる可能性もあると指摘します。改革もしかり。大きな改革のあとには大きな反動があり、安定を求めたつもりがかえって不安定な状態を生みだすきっかけになるかもしれません。過去から学ぶこと、即ち温故知新。先達の知恵から学びつつ、今年も着実に歩みを進めたいと思います。そして、その歩みが応分の成果を生み、それが少しでも皆様のお役に立つことを願いつつ、年頭のご挨拶とさせていただきます。

## ◆ 2. 自然科学の時間 ◆

### 「5分で読める寄生虫ばなし」

かたひら ひろたか  
片平 浩孝

(麻布大学生命・環境科学部 講師)

#### 1. 見えない生き物が“見える”

「実は私、“見える”んです。」と、言われたら突然何事かと思われるだろう。しかし、見えるんです。何が？ 寄生生活を営む小さな生物達が。そりゃ、検査したり顕微鏡を覗いたりすれば見えるでしょうよ。となるが、そういう話ではない。寄生虫を直接見なくとも“見える”のである。身の回りの暮らしの中で。自然に出かけたとき。その他もろもろの場面で。無意識のうちに。

え、なにこれ？ 怖い話？ というわけではなく、専門家としての目線をお伝えできれば、との思いから書き始めてみた次第である。“見える”というのは、虫取り名人が森に暮らす虫を容易に探し当てたり、釣りの達人が川のどこに糸を垂らせばよいかわかっているのと同じような感覚と言えれば良いだろうか。寄生虫研究者のもつ特殊な、ごく一部のわかるひとにはわかる感覚である。

野山や海、川に出かけて風景を見たり、そこに暮らす動植物を見たりするだけで、その裏に潜む寄生虫がおぼろげに浮かんでくる。しかもわりと当たる。一緒に出かけて同じ物を見てるはずなのに、焦点の定まってないような、どこか遠くだか近くだかをボンヤリ見てるような顔をしていたら要注意だ。そんなときこそ、まさに寄生虫研究者だけが見える妄想の世界が目の前に広がっていると考えて間違いない。いま何か違うこと考えてる？ 見てるようで見てないのでは？ と、凶星をつくチャンスである。実際によく言われてきたので、今ではあえて視ないように気をつけているほどだ。

#### 2. “見える”ワケ

見える、いや、視てしまうのには、一応それなりに理由がある。ある意味で職業病的なものだ。以後、言い訳であるが、少しばかりお付き合い願いたい。寄生虫研究者の頭の中には、いろいろな寄生虫の「生きざま」がインプットされている。どんな形の寄生虫が、どういった生物を宿主として利用しているのか、などなど (図1)。これが良くも悪くも日々止まることなく、胡散臭い勘ピューターを駆動させている。



図1. 出会ってきた寄生虫の例

いわば第六感的なこの感覚について、川の写真を例に説明を試みよう (図2)。ここに挙げる写真をみなさんはどう捉えるだろうか。ジリジリとした真夏の昼下がり、ゆるやかな細流、背丈のある草、水中の植物、護岸。今や日本のどこにでもありそうな平凡な風景？



図2. 風景の一例

それが、もし視えているならば以下のようになる——これくらいのゆるい流れならオイカワやカワムツなどの小魚や、もしかしたらニホンウナギが棲んでいるかも。繁茂した水草には餌となるヨコエビやミズムシなどの小さな節足動物が隠れていそうだし、そうならば〇〇な寄生虫がいるはず。水面下の護岸にカワナなどの巻貝がいれば、それを利用する△△な寄生虫も。ああ、水生昆虫もいるな。地域がどこらへんで、川底の石の大きさがこれくらいなら、××な寄生虫が採れそう。人目につきづらい場所として水鳥のサギ類が休息のためにやってくるなら、あれも、これも、いていいはず！ と。妄想が独り歩きして、とたんに焦点の定まらない目をし始めることに。もちろん盛大に勘違いして、当たらないときもある。しかし、研究者としてはむしろ思惑が外れる方が面白い。自身の知識や想像を超えた未知のルールが見つかるかもしれないからだ。

### 3. 一般的な認識

本稿ではシレっと寄生虫の話が始めたが、そもそも寄生虫と聞くと、気持ち悪い、怖いなどのネガティブなイメージを思い浮かべるだろう。それもそのはず。寄生虫の中には確かに有害なものがおり、ヒトを専門とする人類の天敵もいる。スマホが普及し、ネットや交通網も発達して、液晶画面上のタップ一つで玄関先に綺麗なご飯が届く。そんな時代であっても、我々は寄生虫による被害を克服できずにいる。例えば、世界を見渡すと血液寄生性のマラリア原虫によって未だ多くの命が失われ続けているし、国内ではアニサキス線虫による食中毒がたびたびニュースを賑わせている。

日本はかつて国民の7割が回虫<sup>かいちゅう</sup>や蟯虫<sup>ぎょうちゅう</sup>などの線虫類に感染しており、寄生虫天国と揶揄されたこともある。今ではまったく想像もつかないが、2015年度付で座高測定とともに廃止されるまで、蟯虫検査が学校健診で実施されてきたのは、そうした歴史ゆえである。映画や漫画を含め、知らず知らずのうちにさまざまなメディアを通じて寄生虫の恐怖を刷り込まれ、忌避すべきものとして広く認識された現在。これはこれである意味、教育普及が大成功をおさめた状況とも言えるかもしれない。

#### 4. 生き物としての面白さ、重要性

筆者自身も、初めは、どことなく暗い負の雰囲気によって寄生虫学に足を踏み入れたような気がする。もうあまり記憶が定かではないが、自分も何かしら人類の利益に直結した仕事をした、といった変に正義感みだ青さがあつたような。しかし、今はそうした感染症としての側面に全くこだわりはない。どちらかと言うと、生き物としての面白さ、それを知りたい純粋な気持ちで研究活動を支えている。

ここで冒頭の陳腐な伏線を回収することになるが、生態系において寄生虫は普遍的な存在である。生物いるところに寄生虫あり。むしろ地球自体が寄生虫天国（パラダイス）と表現する研究者もいるくらいだ。

カリフォルニアの塩性湿地にさまざまな生物がどれくらい生息しているかを調べた研究では、驚異的なデータが得られている。なんの変哲もない湿地に潜む寄生虫の総重量は、そこにやってくる高次捕食者の水鳥のそれをはるかに上回っていた。ちなみにこの成果は科学誌最高峰の「ネイチャー」に掲載されている。

寄生虫自体が餌となって、あるいは宿主を操作することによって生態系内のエネルギー流を支える現象や、食う食われるの関係に乗って想像以上に多様な生物間相互作用を生み出している事実も明らかとなっている。生態系の一員として、場合によっては影の支配者として、寄生虫の重要性が世界的に認知されつつある。

#### 5. 生物進化の玉手箱、そして宇宙へ

寄生生活とは、生物がとりうる生活様式の一つである。光合成によって太陽エネルギーを変換する生き方、誰かを食べる生き方、死体や有機物を分解する生き方、いろいろな生活様式がある中で、「生活環のすべてあるいは一時的に栄養を他者に依存する生き方」を「寄生生活」と呼んでいる。

ざっくりと定義するならば、栄養をかすめとって奪う側を寄生虫、奪われる側を宿主とよぶ。さらに、寄生虫が繁殖場所として利用する宿主を終宿主、生活環の中で次の宿主に乗り移るために利用する宿主を中間宿主として識別している。中間宿主についてはもっと細かな区分があるが、ここでは割愛する。

他の生物に栄養を依存する寄生生活は、実は特別な現象ではない。どうやらわりと頻繁に進化してきたようだ。地球の生命史において少なくとも独立に 60 回以上、寄生性が獲得されてきたと今では考えられている。現世にありふれている寄生虫は、何か単一の祖先から派生してきたわけでは決してない。さらには、寄生生活へと至る道筋もさまざまである。例えば、①もともと餌として食べられていた生物が捕食者の中で生き延びられるようになった、②体の大きな他種の体表で暮らしていた生物が栄養を奪えるようになった、③不適な環境をやりすごすための休眠戦略の代わりに他種を安定した環境として利用するようになった、などが挙げられる。

このような寄生虫の進化を振り返るたび、いつも気になってしまうことがある。それは、極限環境にも寄生虫は存在しうるのだろうか？ ということである。少なくとも火山活動によって変化した強酸性の湖や川でも、寄生虫は発見されている。寄生生活が進化しやすい生活様式であると言うならば、もっともっと過酷な宇宙環境や、他の惑星ではどうだろうか？

地球外生命体や第二の地球について、誰しも思いを巡らせたことがあるだろう。かの有名な映画のように、もしかしたらそこには寄生虫のような生命体がいるかもしれない。どんな形で、ど

んな搾取をしているのか、宇宙生物学（アストロバイオロジー）との親和性があまりにも良さそうで、ついつい視える妄想の範囲はどこまでも広がっていく……。

## 6. 視える日々と仲間づくり

なんとなくではあるが、寄生虫研究者の思考をおわかりいただけたらどうか。普段何の気無しに流している風景。その裏に垣間視える別世界のイメージを。目の前にいる生物は寄生虫の乗り物にすぎず、いわばタクシーやバスのように、生活範囲や暮らし方、時期にあわせて乗客が異なる様子を。

寄生虫が単に病気の原因としてではなく、普遍的で魅力あふれる生物であることは、残念ながら国内で認知されていない。以下は個人的な考えに過ぎないが、研究の本質は役に立つかどうかではなく、人類が存続する限りにおいて知識を次世代へと紡ぐことにある。分野の頂上を目指すのもよし。フラフラと気の向くまま研究して裾野を広げるのもよし。研究者自身の多様性を維持しながら、視える楽しさや不思議、得られた知識を後世に継承し、新たな理解者を生み出す責を一人一人が負っているはずだ。

そうした知識継承の一環として、とある寄生虫学の教科書を翻訳する企画に取り組んだ。そのご縁から本紙に寄稿する機会をいただいた次第であるが、難解な本のため、その内容を紹介するよりも、個人的な日常を碎きに碎いて本稿にまとめさせていただいた。翻訳や執筆の背景はひとまず置いておくとして、高価かつ専門的すぎて売上はあまり見込めないと思う。しかし、いつかどこかでそれを必要とする誰かが読み解き、新たな世代へと知識が紡がれることがあれば望外の喜びである。

実は私、視えるんです。と、誰かが繰り返す未来を夢見て、小話の終わりとさせていただく。

### － 執筆者略歴 －



2002年 札幌市立旭丘高等学校卒業  
 2008年 北海道大学水産学部生物生産学科卒業  
 2013年 広島大学大学院 生物圏科学研究科博士後期課程修了  
 2019年 麻布大学 生命・環境科学部 講師  
 現在に至る  
 近著に『寄生虫進化生態学』（2022年2月刊、共立出版）

### ◆ 3. 会員社訪問 社長インタビュー (No.9) ◆

#### ●社長紹介●

かたおか かずなり  
片岡 一成

(当協会における現職:理事(2021(令和3)年~))



#### ●訪問社情報●

【社名】株式会社 恒星社厚生閣  
(KOUSEISHA KOUSEIKAKU Co., Ltd.)

【創立】1922 (大正 11) 年 7 月

【HP】<http://www.kouseisha.com/>

【主な出版分野】天文・水産系の学術専門図書

#### ■テーマ1 「株式会社恒星社厚生閣について」

一 御社の沿革等をお聞かせください。

1921 年、創業者 岡本正一が厚生閣書店を創業、1922 年に出版社、厚生閣を興しました。その後、麴町区下六番町(現・千代田区六番町)に移転し、『詩と詩論』『国語体系』など国語教育関係書を刊行。1931 年には、岡本が独立以前に勤めた警醒社の同僚であった土居客郎が恒星社を設立し、天文学関連書を刊行。1944 年、戦時下の企業整備令により両社が合併、恒星社厚生閣を創設。その後、戦禍を被り、当時、倉庫のあった四谷(現・新宿区四谷三栄町)へ移転し、現在に至ります。

#### ■テーマ2 「本について」

一 会社の転機となった本は何でしょうか？

山本一清著『星座の親しみ』でしょうか。

2 代目代表であった土居客郎は、いまでいう天文マニアだったそうで、当時、アマチュア天文学家育成に熱心であった山本一清先生(京都帝国大学教授)の講演内容をまとめて 1937 年に刊行したようです。たいへんご好評をいただき、これを嚆矢に、戦後は、『新天文学講座』などの天文学の学術専門図書を数多く出版することになりました。その著者のお一人、荒木俊馬先生(京都産業大学初代総長)による児童書『大宇宙の旅』(昭和 25 年刊)は、漫画家 松本零士先生が幼少期に読まれた際にインスピレーションを得られ、後の代表作『銀河鉄道 999』の誕生につながったとお聞きしました。

こういった縁もあって、2011 年に有志の天文学者の先生方より、天文学普及につながる活動についてご相談があり、「天文宇宙検定」を催すこととなります。天文学界の錚々たる先生方、松本零士先生、元 JAXA 宇宙飛行士の土井隆雄先生に、検定の趣旨にご理解をいただき、広くお力添えをいただけているのも、元をたどれば、山本一清先生の著作があったからこそつながったご縁



だと感じています。おかげさまで、当検定は、今年で12年目を迎え、受験者数も延べ2万人超となりました。

### 一 本が売れない（と言われている）時代、今後の本への可能性は？

この先、本のかたちは変わっていくでしょうけれども、未知へと踏み出すきっかけになるような輝きを失わなければ可能性は広がっていくと思います。もちろん、情報の確かさについて、出版社が負う社会的な責任は重大ですけれども。

今回、原稿と共にお送りした浮かれた表情の写真は、秋田県能代市にあるJAXA能代ロケット実験場の一般公開イベントへと向かう途中のスナップ写真です。私、JAXA主催イベントやプラネタリウム・科学館のイベント会場へはたびたび足を運んでいるのですが、どこも毎回、来場者のワクワク感が溢れています（私だけが浮かれているわけではありません。多分……）。

その空気感は、この10年間、弊社が主催してきた天文宇宙検定の試験会場で感じる空気感とどこか似ています。「宇宙が好き」な誰かとワクワクを共有できる体験、未知の知識に触れる驚きへの渴きを毎回肌で感じています。

いまの子どもたちが大人になって職業選択をするとき、その活躍の場として宇宙を選べるような未来が実現しつつありますが、弊社刊行物が、微力ながら役立てば素敵だと思います。未来の宇宙飛行士が、弊社の本を読んで宇宙に興味を持ちましたという話が聞ける日がくれば、と。

## ■ テーマ3 「過去・未来について」

### 一 今でもよく覚えているエピソードはありますか？

四半世紀、編集者をしていますので、いっそ記憶喪失になって忘れてしまいたいほど恥ずかしい体験なら数限りなくありますが、嬉しくて忘れられない思い出をお話しますね。

弊社には、加藤万里子先生の著作で、『100億年を翔ける宇宙』というロングセラーがございます。90年代半ば、視覚障がいがある学生さんが加藤先生の授業を受講されることになったのがきっかけで、ご著書のバリアフリー版（点字版）を刊行することになりました。紙面に特殊な透明樹脂を圧着することで、惑星の大きさの違いや、さまざまな天体の形が触覚でわかるという本です。

刊行後、視覚障がいのあるお子様をもつお母様からお電話をいただき、「こういう本は売れないでしょうか？でも作ってくださってありがとう。子どもと一緒に大切に読みますね」と言っていただけで泣きそうになるほど嬉しかったです。

入社以来、指導してくれた先輩編集者が家庭の事情で退職され、編集者として独り立ちして間もない不安ばかりの頃で、自分が携わった本が読者の手に届いている実感を得た初めての体験でした。生涯忘れられないです。

## ■ テーマ4 「自然科学書協会の今後について」

### 一 今後取り組みたいこと、期待していることは何でしょうか？

取り扱うジャンルが違っていると、まるで異業種の会社であるかのように社風からすべてが違うのがこの業界の特徴で面白い点ですが、この先、ますます業界の横のつながりが重要になっていくと思います。協会の活動を通して従来の垣根を越えるコペルニクスの転回で、未来の本がもっと面白くなればよいな、と思っています。

## ◆ 4. 出版平和堂第 54 回出版功労者顕彰会報告 ◆

10 月 7 日(金)は朝から冷たい雨が降り続き、第 1 部の顕彰会は出版平和堂(神奈川県箱根町)ではなく、第 2 部の懇親会会場の箱根ホテルで正午から執り行われると、主催である日本出版クラブからの案内が前日にありました。

第 52 回と第 53 回は COVID-19 の感染拡大の影響により、中止したため今回は 3 年ぶりの開催となり、第 52 回～第 54 回の 18 名の故人の方が新顕彰者となりました。

(第 52 回 4 名、第 53 回 10 名、第 54 回 4 名)

なお、自然科学書協会の会員社(元会員社も含む)の新顕彰者は下記の通りです。

<第 53 回>

志村 幸雄 様(工業調査会)、山本 泰四郎 様(彰国社)

<第 54 回>

井上 瑩子 様(井上書院)

当協会は維持団体のひとつであり、当協会を代表して飯塚尚彦理事長が出席しました。第 1 部では維持団体の代表者によるご挨拶・新顕彰者名の奉告、献詞がありました。また参加者全員による黙祷、献花も行われました。第 2 部では顕彰者の方々への敬意と感謝の念を込めて献杯をし、ご遺族・関係者の方々との懇親の場となりました。式典は滞りなく 14 時に閉会となりました。

(広報委員会)



献花する飯塚尚彦理事長

## ◆ 5. 事務局だより ◆

### ●理事会

- ・2022 年 12 月 15 日 (木) / オンライン方式 (Zoom)

### ●委員会

- ・2022 年 11 月 16 日 (水) 販売・出展委員会 / 文化産業信用組合会議室

### ■第 72 期会員報告会・新年会員懇親会

2023 年 1 月 17 日 (火) 11 時 30 分 / 出版クラブホール・会議室

### ■自然科学書フェア開催予定

開催期間：2023 年 3 月 1 日 (水) ~ 5 月 31 日 (水)

開催店舗：函館 蔦屋書店

■2022 年 11 月 21 日 (月) に開催予定でありました「第 23 回 出版・印刷人の集い」(当協会協賛) は、COVID-19 の感染状況を鑑み、主催者側の判断により中止となりました。

■2022 年 12 月 1 日 (木) に開催する旨ご案内をしておりました「年末会員懇親会」は、COVID-19 の感染者数が増え第 8 波が迫っている状況を鑑み、感染防止の観点から遺憾ながら開催中止といたしました。

### ●届出事項変更

<住所変更>

一般社団法人 農山漁村文化協会

新住所：埼玉県戸田市上戸田 2 - 2 - 2

電話：048-233-9334

FAX：048-299-2815

■当協会前監事の秋元康男氏 (文化産業信用組合前理事長) が、2022 年 11 月 3 日 (木)、秋の叙勲にて旭日単光章を受章されました。謹んでお祝い申し上げます。

## ◆ 6. 編集後記 ◆

会報をお読みいただき、ありがとうございます。

「事務局だより」に記載の通り、昨年末に予定していた行事が相次ぎ中止となり、当初予定していた記事数からは減りましたが、2023年も無事に1回目の会報が発行できたことを嬉しく思います。

会報では毎回いろいろな記事が掲載されますが、2020年から始まった特集記事「会員社訪問 社長インタビュー」が私は一番好きかもしれません。社長になる方は私とは別次元にいるようにこれまで感じていましたが、このインタビュー記事を読むことによって、社長さまとその会社に親近感や興味を抱くようになりました。今回で9回目となりました。もし読んでいない過去の記事がありましたら、当協会ホームページにバックナンバーを掲載していますので、ぜひお読みください。

会報一覧

<https://www.nspa.or.jp/bulletins/>

(広報委員会 新井 明良：コロナ社)

### ● 第71期／72期広報委員会 ●

委員長：牛来真也（コロナ社）

副委員長：筑紫和男（建帛社）

委員：浜田 亮（オーム社）

山田貴史（化学同人）

門間順子（共立出版）

加藤義之（建帛社）

高田由紀子（恒星社厚生閣）

新井明良（コロナ社）

逸見健介（南江堂）

飯岡千恵子（丸善出版）

